

# コロナ禍における日本人学生の 関係流動性と異文化感受性についての検討

胡 安琪\*・伊藤 雅一\*  
(2022年10月17日受理)

## Relational Mobility and Intercultural Sensitivity of Japanese Students in the Coronavirus Pandemic

Anqi HU\* and Masakazu ITO\*  
(Received October 17, 2022)

### Abstract

In recent years, due to the impact of the new coronavirus infection, relationships surrounding individuals have been formed not only in person but also online; the greater the use of SNS, the more extensive the social network. Individual's social networks have become more extensive as opportunities to build relationships have arisen not only in person but also on the Internet. In this paper, we examined how this new lifestyle, in which online contact has become more active, affects Japanese student's intercultural sensitivity and relational mobility. As a result of correlation analysis, weak positive correlation was found between relational mobility and intercultural sensitivity. Also, it was indicated that individuals have higher online relational mobility than face-to-face relational mobility. Furthermore, the future of education for international understanding will be discussed.

【キーワード】 Relational mobility、Intercultural sensitivity、関係流動性、異文化感受性

### 1. はじめに

近年、新型コロナウイルス感染症の影響により、個人を取り巻く人間関係は対面のみではなくオンライン上でも形成されるようになった。従来対面での人間関係構築が一般的だった生活様式から、オンライン授業、オンラインイベントなどの増加により、インターネット上での人間関係構築が必要になった。これらの活動が増えたことによって、SNSの利用が増加し、新たな生活様式に合わせた、人間関係構築ツールとなっていると考えられる。人間関係を構築する機会が、対面のみならずインターネット上でも生まれたことにより、人々の社会的ネットワークがより広範囲になっ

---

\* 茨城大学全学教育機構 (Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University)

たのではないかと予想される。本研究では、オンライン上での接触が活発となった、新たな生活様式が日本人学生の対人関係構築や異文化への認識にどのような影響を与えるかについて検討する。具体的には、対面およびオンラインにおいて、新しい関係を自発的に形成し、古い関係を解消する度合い（関係流動性）や異文化間コミュニケーションを円滑にするための能力（異文化感受性）にどのような影響を与えるかについて調査し分析を行なう。更に、本稿では今後の国際理解教育のあり方についても考察する。

日本人は従来異文化間感受性が欧米などの既に国際化した国々に比べ、低いとされてきた (Thomson et al., 2018)。しかしオンラインでの交流が活発になったことにより、国内でも自分の暮らす地域とは異なる地域に暮らす人々との交流が増えれば、異文化間感受性を高めることも可能なのではないかと考える。そのためには、より多くの異文化的背景を持つ人々と出会ったり、人間関係の構築を経験したりする必要がある。しかし、日本における普段の暮らしで外国人と交流する機会はまだ限られている。そこで、日本国内の環境において異文化間感受性を高めるためには、関係流動性と異文化間感受性の関係性を調べ、関係流動性を高めることで異文化に対する肯定的感情や接触意欲を高められるのかについて調べる必要がある。

したがって、本研究の目的は、オンラインでの人間関係構築が日本人大学生の関係流動性および異文化間感受性にどのような影響を与えるかについて明らかにすることである。

### 1.1 関係流動性について

関係流動性に関する研究は、世界中でされており、39 カ国間の関係流動性を比較する研究などが展開されている (Thomson et al. 2018)。Thomson et al. (2018) によれば、ある社会では、社会の中で暮らす人間関係はほとんど固定化されており、個人は安定した、長続きする人間関係を築く傾向にある。その中で暮らす人々は、友人、家族、恋人などに対して、選択の余地を持たない。一方で別の社会では、とても自由な人間関係構築を行う社会もある。そのような社会では、個人は自由に新たなパートナーを探し、古い友人などと関係を解消することが容易にできるとされている。Yuki et al. (2007) によれば、関係流動性とは、とあるコンテキストにおいて、新しい関係を自発的に形成し、古い関係を解消する度合いであると定義されている。このトピックに関して、何十年もの間にわたって、なぜ社会によって異なる人間関係構築を行うのかについて多くの研究者が検討してきた (Thomson et al. 2018)。Barclay (2016) によれば、より人間関係構築が流動的な社会ではパートナーの選択肢が増えることにより、個人間の協力関係を高めることが示された。また、関係流動性は、親しい友人に対する自己開示の仕方の文化差や友人間の類似性が、個人の関係流動性認知を媒介すると明らかにしている (Schug et al., 2009; Schug et al., 2010)。

欧米などの国々は、人間関係の構築や解消をすることが比較的容易とされており、関係流動性が高いことが示されている。その一方で、日本では、新たな人間関係構築や構築が難しく、一度できた集団の中に長期的にとどまる傾向があることから、比較的關係流動性が低い国だということが示されている (Yuki et al., 2007; Thomson et al., 2018)。関係流動性は、個人の周りの環境に焦点を当てた尺度であるため、個人の特性ではなく環境が変化することで関係流動性も変化すると考えられる。さらに、個人を取り巻く環境である関係流動性が変化することにより、その中で個人が感じる異文化に対する受容度合いも影響を受ける可能性がある。

近年、新型コロナウイルス感染症の影響により、日本でもオンライン上での交流が活発となり、これまでの人間関係構築とは異なる新たなスタイルが生まれつつある。そのため、今一度日本人学

生における、人間関係構築における流動性を改めて検討することは意義のあることと考えられる。また、コロナ禍の中では人々との関わり方が変わってきている。従来、日本の大学では、学生生活において、授業、友人関係、サークル活動などは対面が主流であったが、近年はオンライン授業、オンライン交流イベントなどインターネットを通じて教員や友人などと接触する機会が増えたと考えられる。しかし、対面とオンラインでは人間関係の形成の仕方が異なるのではないかと予想される。そこで、本研究では対面での関係流動性に加えて、オンライン上での関係流動性についても検討する。

## 1.2 異文化間感受性について

心理学における異文化間感受性の定義にはさまざまなものがある。例えば Hammer et al., (2003) は異文化間感受性を「文化的差異を認識し経験する能力」として定義し、個人の認知構造や世界観がその一因だと考えた。また、Bhawuk & Brislin (1992) は、異文化間感受性とは、個人の自文化とは異なる文化への興味、異文化への気付きやすさ、そして異文化を持つ人々へのリスペクトなどを含む複雑な心理学的資質であると定義している。そこで、Chen & Starosta (2000) は、これらの概念をより明確にするために、異文化間感受性をより具体的に求めるための研究をおこなった。彼らによると、異文化間感受性は認知、感情、行動という異文化間相互作用における3つの要素から構成されている (Chen & Starosta, 2000)。本研究における異文化間感受性の定義は、Chen & Starosta (2000) が示した、「異文化間コミュニケーションにおける適切かつ効果的な行動をするため、異文化理解と異文化に対する受容性を促す、肯定的な感情を想起する能力」とする。

異文化間感受性に関する研究はこれまで欧米などで多くの蓄積がある。しかし、日本において周辺環境が異文化感受性にあたえる影響を調べた研究はまだ少ない。近年、日本でも国際化がますます進んでいることから、今後はより一層、文化的差異を認識し、異文化に対する受容性を促すことで、異文化間のコミュニケーションを円滑にするためのポジティブな感情を豊かにすることが重要となる。それにより、異文化間感受性を高めるための教育が必要であると考えられる。茨城大学では、これまで交換留学や短期海外研修などさまざまな国際教育がされてきたが、近年は新型コロナウイルス感染症の影響により、国際交流活動がオンライン上でも多く実施されている。文部科学省 (2019) が示したオンライン教育の指針からも、オンラインでの異文化間交流はこれからも持続すると考えられるため、近年における日本人学生の異文化間感受性について改めて検討する必要があると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、近年オンラインでの交流が活発となっていることから、新たなコミュニケーション様式に焦点を当て、その環境下で暮らす人々のコミュニケーションスタイルの変化と、関係流動性、オンライン上での関係流動性、および異文化間感受性の関係について検討することである。リサーチクエスションについては以下の通りである。

- ・対面時の関係流動性とオンライン上での関係流動性に違いはあるのか。
- ・関係流動性・オンライン上での関係流動性および異文化間感受性の間に相関はあるのか。
- ・コミュニケーションスタイルの変化は関係流動性、オンライン上での関係流動性、および異文化間感受性にどのような影響を及ぼすのか。

以上のリサーチクエスションについて本研究では検討する。

### 3. 方法

#### 3.1 調査参加者

本研究では、茨城大学にて2022年度に1年次全学必修の基盤教育科目を履修している学生(N=1645)を対象とした。対象とした学生のうち、回答の得られた1485名(男性902名、女性568名、その他15名、平均年齢19歳、 $SD = 1.00$ )を対象とし、2022年8月に講義時間の一部を利用して質問紙調査を実施しコロナ禍でのコミュニケーションの変化、関係流動性、オンライン関係流動性、異文化間感受性などに関する質問への回答を求めた。

#### 3.2 測定概念

本研究では、性別、年齢、国籍などのデモグラフィック変数に加え、以下の尺度を用いた。

##### 対面での関係流動性

関係流動性(Relational mobility: 以下RM)を計測する上で、Yuki et al. (2007)の関係流動性尺度を用いた。関係流動性尺度では回答者自身ではなく、その周辺の人々の関係流動性を尋ねることで、回答者の周りの環境に対する認識を測定するものである。具体的には以下のように実験参加者に質問紙上で説明した。

「対面コミュニケーションにおける」あなたの周囲にいる人々(学校の友人や知人、職場の同僚、近隣の住民など)についてお尋ねします。次のそれぞれの文が、それらの人々にどれくらい当てはまるかを、想像してお答え下さい。注: 文中に「集団」とある場合は、友人グループ、趣味やスポーツのサークルや部活動、企業など、互いに個人的な関係を持つ、もしくは目標を共有した複数の人の集まりを指します。

その上で、「彼ら(あなたの周囲にいる人々)には、人々と新しく知り合いになる機会がたくさんある。」や「彼らは、ふだんどんな人たちと付き合うかを、自分の好みで選ぶことができる。」など、実験参加者の周辺の人たちがどれくらい新しい人と出会う機会があるか(以下、グラフ等では「出会い」と表記)、および自身の所属する集団を選択できるか(以下、グラフ等では「選択肢」と表記)について尋ね、最も当てはまる回答を選ぶよう指示した。尺度は合計12項目であり、6件法で回答を求めた。

##### オンライン上での関係流動性

また、本研究では従来の関係流動性に加えてオンライン上での関係流動性(Online Relational Mobility: 以下ORM)についても尋ねた。こちらも関係流動性尺度と同様、Yuki et al. (2007)の尺度を参考とした。具体的には以下のように実験参加者に質問紙上で説明した。

「SNS上で」あなたと関わりのある人々(学校の友人や知人、職場の同僚、近隣の住民など)についてお尋ねします。媒体は問いませんが、次のそれぞれの文が、それらの人々にどれくらい当てはまるかを、想像してお答え下さい。



以上のように説明した上で、最も当てはまるものを答えさせた。質問項目は関係流動性尺度と同様全 12 項目であり、6 件法で回答を求めた。

### 異文化間感受性

異文化感受性 (Intercultural sensitivity scale: 以下 ISS) の測定は Chen & Starosta (2000) が開発した異文化感受性尺度を参考にしている。また、本研究では鈴木・齊藤 (2016) が日本語に翻訳した日本語版異文化感受性尺度を用いた。鈴木・齊藤 (2016) が作成した ISS は全 22 項目あり、「異文化への肯定的な感情」、「異文化へのアンビバレントな感情」、「異文化への否定的感情」の 3 因子で構成されている。具体的には、まず、異文化への肯定的な感情の項目では「私は異文化的に異なる人々と関わる時、できるだけその人について知ろうとする」や「私は、文化的に異なる人々の振る舞いや慣習を尊重する」などが含まれており、異文化に対して能動的かつポジティブな感情を測定している。次に、異文化へのアンビバレントな感情では、「私は、文化的に異なる人々とうまく関われる自信がある」や「私は、文化的に異なる人々を前にすると、話しぶrait と思う」(逆転項目) など、文化の違いに対する不安感や自信と喜び、および不安感と回避的行動の両方を含んだ感情を測定している。最後に、異文化への否定的な感情では、「私は、文化的に異なる人々の意見や考えを受け入れられないだろう」(逆転項目) や「私は、自分の文化は他の文化よりも優れていると思う」(逆転項目) など、異文化に対する否定的で自文化中心的な感情を測定している(鈴木・齊藤, 2016)。これらについて、いずれも 5 件法で回答を求めた。

### コミュニケーションスタイルの変化

本研究では、2022 年度時点での、日本人のコミュニケーションスタイルの変化について尋ねる質問をしている。「新型コロナウイルスの影響について当てはまるものを選んでください。」と尋ねた上で、最も当てはまるものを「1: 大きく減った」から「5: 大きく増えた」の 5 件法で回答を求めた。全 4 項目あり、「人と直接会う機会が」、「外に出る機会が」、「親族とのコミュニケーションが」および「オンラインでの交流が」とした。以上の項目は、コロナ禍の中の人々のコミュニケーションスタイルがどのように変化したかについて明らかにするためのものである。

## 4. 結果

本研究では、3 つの段階に分けて統計分析を実施した。まず、対面時の関係流動性とオンライン上での関係流動性の違いについて検討した。次に、それぞれのコミュニケーションスタイルの変化、関係流動性、および異文化間感受性における各要因の関連について検討した。最後に、コミュニケーションスタイルの変化が関係流動性、オンラインでの関係流動性、および異文化間感受性に及ぼす影響について検討した。その結果は以下の通りである。

### 4.1 対面時の関係流動性 vs. オンライン上での関係流動性に違いはあるのか

関係流動性およびオンライン上での関係流動性においての違いについて明らかにするため、対応のある  $t$  検定を行ったところ、出会いにおいて関係流動性 ( $M = 4.02, SD = 0.77$ ) とオンラインでの関係流動性 ( $M = 4.43, SD = 0.83$ ) の間に有意差があることがわかった。また選択肢においても関係流動性 ( $M = 3.79, SD = 0.64$ ) とオンラインでの関係流動性 ( $M = 4.39, SD = 0.77$ ) の間に有意差があることがわかった。具体的には、出会い、選択肢の両方において、オンライン上での関係流動性の

方が対面時の関係流動性より、有意に高かった。 $(t(1411) = -26.85, p < 0.001)$ 。

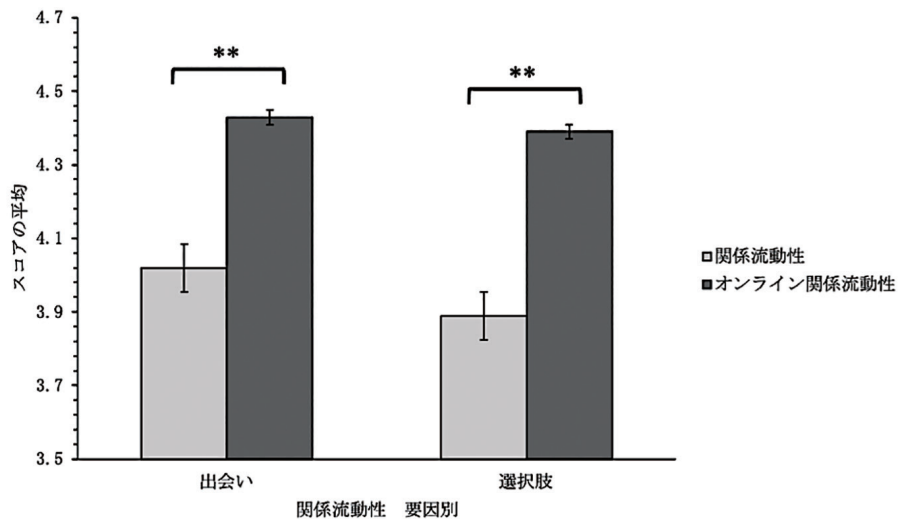


図1 関係流動性とオンライン関係流動性の違い

\*\* :  $p < 0.01$ .

#### 4.2 コミュニケーションスタイルの変化、関係流動性および異文化感受性の関連

各尺度の間の関連について明らかにするために、ピアソン係数を用いて相関分析を行った。

初めに、①異文化間感受性、②関係流動性、および③オンライン上での関係流動性の全ての項目の平均を用いて相関分析を行ったところ、全ての項目において弱い相関が見られた(表1)。

次に、関係流動性、オンライン関係流動性、異文化間感受性を要因別にみた時の相関分析をおこなった。その結果、⑥オンライン関係流動性(出会い)と⑦オンライン関係流動性(選択肢)の間には正の相関があった。⑩異文化感受性(否定的感情)と⑥オンライン関係流動性(出会い)⑦オンライン関係流動性(選択肢)において弱い正の相関が見られた。また、⑧異文化感受性(肯定的感情)と④関係流動性(出会い)においても弱い正の相関が示された(表2)。

表1 関係流動性、オンライン関係流動性、異文化間感受性 全項目平均の相関 (N = 1485)

	①異文化間感受性	②関係流動性	③オンライン関係流動性
①異文化間感受性	-		
②関係流動性	.208**	-	
③オンライン関係流動性	.196**	.299**	-

\*\* :  $p < 0.01$

表2 関係流動性、オンライン関係流動性、異文化間感受性 各要因間の相関 (N = 1485)

	④関係流動性 (出会い)	⑤関係流動性 (選択肢)	⑥オンライン 関係流動性 (出会い)	⑦オンライン 関係流動性 (選択肢)	⑧異文化間感 受性(肯定的 感情)	⑨異文化間感 受性(アンビ バレントな感 情)	⑩異文化間感 受性(否定的 感情)
④関係流動性(出会い)	-						
⑤関係流動性(選択肢)	.306**	-					
⑥オンライン関係流動性(出会い)	.260**	.156**	-				
⑦オンライン関係流動性(選択肢)	.141**	.306**	.578**	-			
⑧異文化間感受性(肯定的感情)	.204**	.068*	.170**	.077**	-		
⑨異文化間感受性(アンビバレントな感情)	.135**	.099**	.067*	0.017	.437**	-	
⑩異文化間感受性(否定的感情)	.143**	.122**	.225**	.227**	.350**	.312**	-

\* :  $p < 0.05$  \*\* :  $p < 0.01$

表3 コミュニケーションスタイルと関係流動性 各要因間の相関 (N = 1485)

	オンラインでの交流	対面での交流	外出する機会	親族との交流	④関係流動性 (出会い)	⑤関係流動性 (選択肢)	②関係流動性 全体
オンラインでの交流	-						
対面での交流	-.178**	-					
外出する機会	-.081**	.578**	-				
親族との交流	0.027	-0.05	0.022	-			
④関係流動性 (出会い)	.068*	-0.007	-0.002	.059*	-		
⑤関係流動性 (選択肢)	-0.007	0.013	0.049	.060*	.306**	-	
②関係流動性 全体	0.039	0.001	0.024	.070**	.848**	.764**	-

\*: p&lt;0.05 \*\* : p&lt;0.01

表4 コミュニケーションスタイルとオンライン関係流動性 各要因間の相関 (N = 1485)

	オンラインでの交流	対面での交流	外出する機会	親族との交流	⑥オンライン関係流動性 (出会い)	⑦オンライン関係流動性 (選択肢)	③オンライン関係流動性 全体
オンラインでの交流	-						
対面での交流	-.178**	-					
外出する機会	-.081**	.578**	-				
親族との交流	0.027	-0.05	0.022	-			
⑥オンライン関係流動性 (出会い)	.120**	-0.05	-.056*	0.018	-		
⑦オンライン関係流動性 (選択肢)	.088**	-0.035	-0.034	0.013	.578**	-	
③オンライン関係流動性 全体	.119**	-0.042	-0.048	0.021	.895**	.881**	-

\*: p&lt;0.05 \*\* : p&lt;0.01

表5 コミュニケーションスタイルと異文化間感受性 各要因間の相関 (N = 1485)

	オンラインでの交流	対面での交流	外出する機会	親族との交流	⑧異文化間感受性 (肯定的感情)	⑨異文化間感受性 (アンビバレントな感情)	⑩異文化間感受性 (否定的感情)	①異文化感受性 全体
オンラインでの交流	-							
対面での交流	-.178**	-						
外出する機会	-.081**	.578**	-					
親族との交流	0.027	-0.05	0.022	-				
⑧異文化間感受性 (肯定的感情)	.138**	-.111**	-.113**	0.001	-			
⑨異文化間感受性 (アンビバレントな感情)	.079**	-.065*	-0.05	0.037	.437**	-		
⑩異文化間感受性 (否定的感情)	.090**	-.080**	-.105**	0.029	.350**	.312**	-	
①異文化間感受性 全体	.126**	-.107**	-.111**	0.035	.756**	.771**	.749**	-

\*: p&lt;0.05 \*\* : p&lt;0.01

さらにコミュニケーションスタイルと関係流動性、オンライン関係流動性、異文化間感受性それぞれの要因の相関分析をおこなった。関係流動性についてはコミュニケーションスタイルとの相関関係はみられなかった (表3)。

オンライン関係流動性については、⑥オンライン関係流動性 (出会い) において弱い正の相関があった (表4)。

異文化感受性については⑧異文化間感受性 (肯定的感情) とオンラインでの交流の間に弱い正の相関があり、対面での交流および外出する機会とは弱い負の相関があった。その他の要因においては、相関関係はみられなかった (表5)。

以上のように、コミュニケーションスタイルの変化、関係流動性および異文化感受性の関係を明らかにするための分析ではいずれも最も大きい相関係数は0.2～0.3程度であり、弱い相関のみが示された。

#### 4.3 コミュニケーションスタイルの変化が関係流動性および異文化間感受性に及ぼす影響

コミュニケーションスタイルの変化が関係流動性、オンライン上での関係流動性そして異文化間感受性にどのような影響を及ぼすのかについて検討するために、コミュニケーションスタイルの変化における項目ごとにそれぞれの要因に及ぼす影響と対応のある  $t$  検定を行なった。コミュニケーションスタイルの変化については、「大きく減った」、「減った」、「以前と変わらない」と答えた実験参加者の群と「増えた」、「大きく増えた」と答えた群の2群に分けて分析を行った。

##### 対面での交流が関係流動性と異文化間感受性へ与える影響

直接人と接触する機会の増減が関係流動性、オンライン上での関係流動性、および異文化間流動性においてどのような影響を及ぼすかについて明らかにするため、 $t$  検定を行ったところ、全体のスコアの平均値においては、対面での人との交流が増えたと答えた人 ( $M=4.34$ ,  $SD=0.75$ ) は、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M=4.43$ ,  $SD=0.70$ ) より、有意にオンライン上での関係流動性が低いことがわかった ( $t(1376)=2.19$ ,  $p=0.03$ )。また対面での人との交流が増えたと答えた人 ( $M=3.56$ ,  $SD=0.50$ ) は、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M=3.67$ ,  $SD=0.47$ ) より、有意に異文化間感受性が低いことがわかった ( $t(1356)=3.94$ ,  $p<0.001$ )。対面時の関係流動性 (減ったもしくは変わらない,  $M=3.91$ ,  $SD=0.57$ ; 増えた,  $M=3.89$ ,  $SD=0.60$ ) において、有意差は見られなかった (図2)。

各尺度を要因別に分けて分析を行ったところ、関係流動性 (会う機会: 減ったもしくは変わらない,  $M=4.02$ ,  $SD=0.77$ ; 増えた,  $M=4.20$ ,  $SD=0.85$ , 選択肢: 減ったもしくは変わらない,  $M=3.79$ ,  $SD=0.64$ ; 増えた,  $M=3.79$ ,  $SD=0.57$ ) およびオンライン上での関係流動性 (会う機会: 減ったもしくは変わらない,  $M=4.43$ ,  $SD=0.83$ ; 増えた,  $M=4.48$ ,  $SD=0.75$ , 選択肢: 減ったもしくは変わらない,  $M=4.38$ ,  $SD=0.77$ ; 増えた,  $M=4.36$ ,  $SD=0.85$ ) では、対面での交流機会が増えた人と減っ

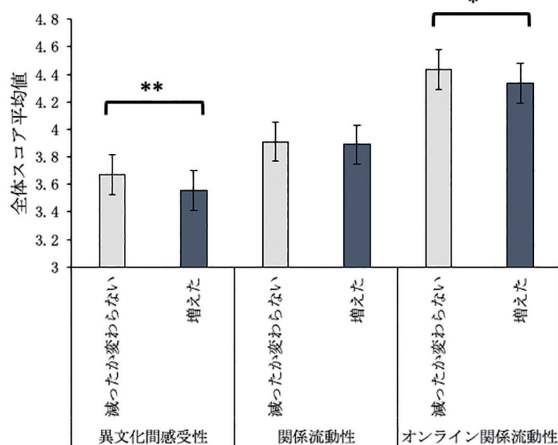


図2 対面での交流の増減と異文化間感受性、  
オンライン関係流動性  
\*:  $p<0.05$ , \*\*:  $p<0.01$

図2 対面での交流の増減と異文化間感受性、  
関係流動性、オンライン関係流動性  
\*:  $p<0.05$ , \*\*:  $p<0.01$

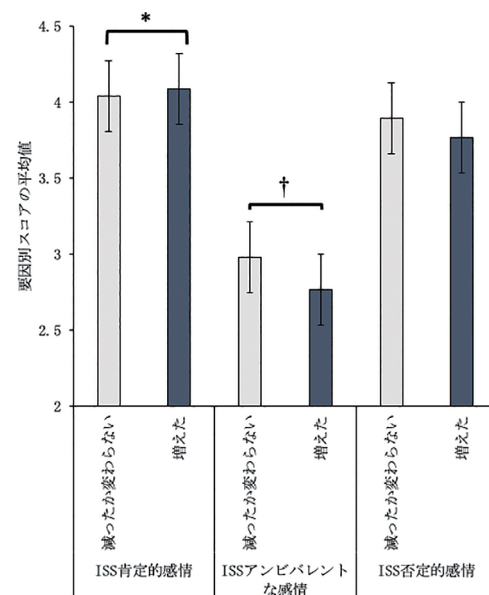


図3 対面での交流機会の増減と異文化間感受性  
†:  $p<0.1$ , \*\*:  $p<0.01$

図3 対面での交流機会の増減と異文化間感受性  
\* †:  $p<0.1$ , \*\*:  $p<0.01$



た人の間に有意差は見られなかった。

異文化間感受性においては、対面での交流機会が増えたと答えた人 ( $M=4.09, SD=0.61$ ) は、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M=4.04, SD=0.57$ ) より、異文化間肯定的感情 (ISS 肯定的感情) が有意に高かった。また、異文化間感受性アンビバレントな感情 (ISS アンビバレントな感情) においては、直接人と接触する機会が増えたと答えた人 ( $M=2.77, SD=0.61$ ) の方が、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M=2.98, SD=0.65$ ) より、低い傾向にあった。否定的感情においては (減ったもしくは変わらない,  $M=3.90, SD=0.67$ ; 増えた,  $M=3.77, SD=0.75$ )、有意差はなかった (図 3)。

### オンラインでの交流が関係流動性と異文化感受性へ与える影響

オンライン上で人と接触する機会の増減が関係流動性、オンライン上での関係流動性、および異文化間流動性においてどのような影響を及ぼすかについて明らかにするため、 $t$  検定を行ったところ、全体のスコアの平均値においては、オンラインでの人との交流が増えたと答えた人 ( $M=4.46, SD=0.70$ ) は、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M=4.26, SD=0.72$ ) より、有意にオンライン上での関係流動性が高いとがわかった ( $t(1413)=-4.28, p<0.001$ )。またオンラインでの人との交流が増えたと答えた人 ( $M=3.67, SD=0.47$ ) は、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M=3.53, SD=0.50$ ) より、有意に異文化間感受性が高いことがわかった ( $t(1392)=-4.67, p<0.001$ )。対面時における関係流動性 (減ったもしくは変わらない,  $M=3.88, SD=0.59$ ; 増えた,  $M=3.92, SD=0.57$ ) において、有意差は見られなかった (図 4)。

各尺度を要因別に分けて分析を行ったところ、対面時の関係流動性においては、オンライン上での交流機会が増えたと答えた人 ( $M=4.05, SD=0.77$ ) は、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M=3.93, SD=0.80$ ) より、関係流動性の新たに人と出会う機会 (関係流動性会う機会) が有意に高かった ( $t(1435)=-2.271, p=0.02$ ) (図 5)。

オンライン関係流動性においては、対面での交流機会が増えたと答えた人 ( $M=4.48, SD=0.82$ ) は減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M=4.25, SD=0.85$ ) と比べて、出会う機会および選択肢

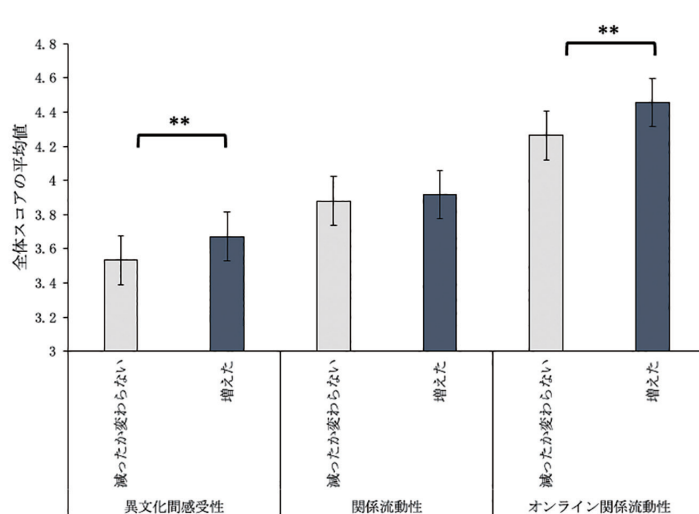


図 4 オンライン上での交流の増減と異文化間感受性、関係流動性、オンライン関係流動性

\*\* :  $p < 0.01$

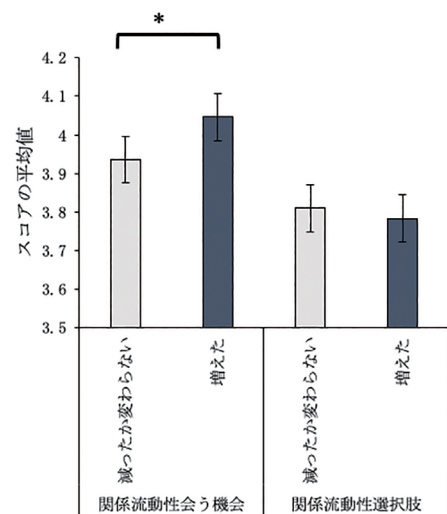


図 5 オンライン上での交流機会の増減と関係流動性

\* :  $p < 0.05$

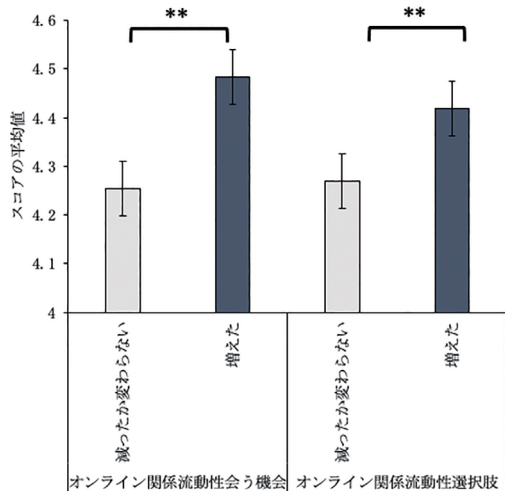


図6 オンライン上での交流機会の増減とオンライン関係流動性

\*\* :  $p < 0.01$

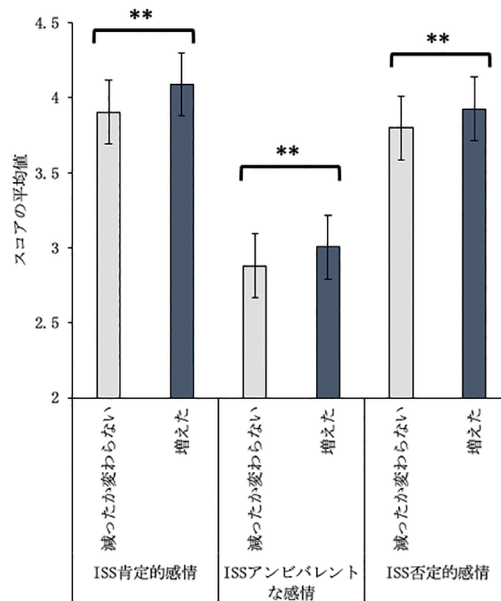


図7 オンライン上での交流機会の増減と異文化間感受性

\*\* :  $p < 0.01$

の両方において有意に高かった ( $t(1443) = -4.48, p < 0.001$ ) (図6)。

異文化間感受性においては、対面での交流機会が増えたと答えた人 ( $M = 4.42, SD = 0.77$ ) は、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M = 3.90, SD = 0.64$ ) より、異文化間感受性肯定的感情 (ISS 肯定的感情) が有意に高かった ( $t(1429) = -5.28, p < 0.001$ )。異文化間感受性アンビバレントな感情 (ISS アンビバレントな感情) においても同様の有意差がみられた (減ったもしくは変わらない,  $M = 2.88, SD = 0.64$ ; 増えた,  $M = 4.09, SD = 0.54$ ) ( $t(1446) = -3.12, p = 0.002$ )。さらに、異文化間感受性否定的な感情 (ISS 否定的感情) においても同様の有意差があった (減ったもしくは変わらない,  $M = 3.80, SD = 0.75$ ; 増えた,  $M = 3.92, SD = 0.65$ ) ( $t(1441) = -2.99, p = 0.003$ ) (図7)。

#### 外に出かける機会が関係流動性と異文化間感受性へ与える影響

外出する機会の増減が関係流動性、オンライン上での関係流動性、および異文化間流動性においてどのような影響を及ぼすかについて明らかにするため、 $t$  検定を行ったところ、全体のスコアの平均値においては、外出する機会が増えたと答えた人 ( $M = 4.35, SD = 0.73$ ) は、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M = 4.43, SD = 0.70$ ) より、有意にオンライン上での関係流動性が低いことがわかった ( $t(1341) = 2.30, p = 0.02$ )。また、外出する機会が増えたと答えた人 ( $M = 3.59, SD = 0.50$ ) は、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M = 3.68, SD = 0.47$ ) より、有意に異文化間感受性が低いことがわかった ( $t(1321) = 3.12, p = 0.001$ )。対面時における関係流動性 (減ったもしくは変わらない,  $M = 3.90, SD = 0.56$ ; 増えた,  $M = 3.92, SD = 0.60$ ) において、有意差は見られなかった (図8)。

各尺度を要因別に分けて分析を行ったところ、関係流動性 (会う機会: 減ったもしくは変わらない,  $M = 4.02, SD = 0.77$ ; 増えた,  $M = 4.09, SD = 0.80$ ; 選択肢: 減ったもしくは変わらない,  $M = 3.79, SD = 0.64$ ; 増えた,  $M = 3.78, SD = 0.61$ ) およびオンライン上関係流動性 (会う機会: 減ったもしくは変わらない,  $M = 4.43, SD = 0.83$ ; 増えた,  $M = 4.43, SD = 0.85$ ; 選択肢: 減ったもしくは変わらない,  $M = 4.39, SD = 0.78$ ; 増えた,  $M = 4.36, SD = 0.75$ ) では、外出する機会が増えた人と減った人の間に

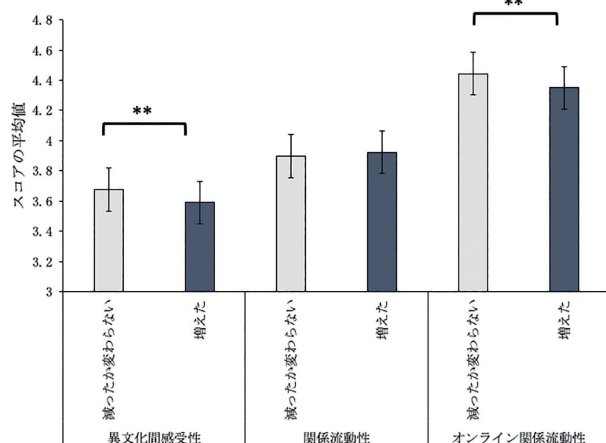


図8 外出する機会の機会の異文化間感受性、関係流動性、オンライン関係流動性

\*\* :  $p < 0.01$

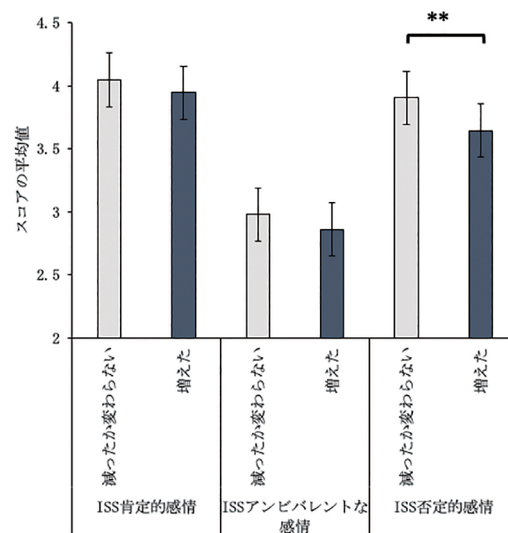


図9 外出する機会の機会の増減と異文化間感受性

\*\* :  $p < 0.01$

有意差は見られなかった。

異文化間感受性においては、外出する機会が増えたと答えた人 ( $M = 3.65$ ,  $SD = 0.81$ ) は、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M = 3.91$ ,  $SD = 0.67$ ) より、異文化間感受性否定的感情 (ISS 否定的感情) が有意に低かった。異文化間感受性肯定的感情 (減ったもしくは変わらない,  $M = 4.05$ ,  $SD = 0.57$ ; 増えた,  $M = 3.95$ ,  $SD = 0.55$ ) および異文化間感受性アンビバレントな感情 (減ったもしくは変わらない,  $M = 2.98$ ,  $SD = 0.65$ ; 増えた,  $M = 2.86$ ,  $SD = 0.58$ ) において、有意差は見られなかった (図9)。

### 家族内でのコミュニケーションが関係流動性と異文化感受性へ与える影響

家族内で交流する機会の増減が関係流動性、オンライン上での関係流動性、および異文化間流動性においてどのような影響を及ぼすかについて明らかにするため、 $t$  検定を行ったところ、全体のスコアの平均値においては、家族と交流する機会が増えたと答えた人 ( $M = 3.95$ ,  $SD = 0.57$ ) は、減ったもしくは変わらないと答えた人 ( $M = 3.83$ ,  $SD = 0.54$ ) より、有意に対面時での関係流動性が高いことがわかった ( $t(1230) = -3.42$ ,  $p < 0.001$ )。オンライン上での関係流動性 (減ったもしくは変わらない,  $M = 4.40$ ,  $SD = 0.71$ ; 増えた,  $M = 4.41$ ,  $SD = 0.70$ ) および異文化間感受性 (減ったもしくは変わらない,  $M = 3.6152$ ,  $SD = 0.45$ ; 増えた,  $M = 3.65$ ,  $SD = 0.49$ ) において、有意差は見られなかった (図10)。

各尺度を要因別に分けて分析を行ったところ、対面時の関係流動性 (会う機会: 減ったもしくは変わらない,  $M = 4.0128$ ,  $SD = 0.77$ ; 増えた,  $M = 4.09$ ,  $SD = 0.80$ ; 選択肢: 減ったもしくは変わらない,  $M = 3.79$ ,  $SD = 0.62$ ; 増えた,  $M = 3.77$ ,  $SD = 0.75$ )、オンライン上関係流動性 (会う機会: 減ったもしくは変わらない,  $M = 4.42$ ,  $SD = 0.82$ ; 増えた,  $M = 4.50$ ,  $SD = 0.90$ ; 選択肢: 減ったもしくは変わらない,  $M = 4.38$ ,  $SD = 0.77$ ; 増えた,  $M = 4.40$ ,  $SD = 0.84$ ) および異文化間感受性 (ISS 肯定的感情: 減ったもしくは変わらない,  $M = 4.04$ ,  $SD = 0.58$ ; 増えた,  $M = 4.08$ ,  $SD = 0.52$ ; ISS アンビバレントな感情: 減ったもしくは変わらない,  $M = 2.97$ ,  $SD = 0.64$ ; 増えた,  $M = 3.03$ ,  $SD = 0.71$ ; ISS 否定的感情: 減っ

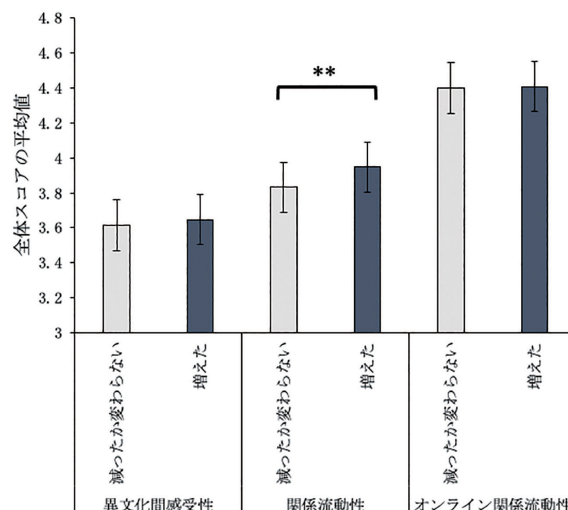


図10 家族との交流の増減と異文化間感受性、関係流動性、オンライン関係流動性

\*\* :  $p < 0.01$

たもしくは変わらない,  $M = 3.90$ ,  $SD = 0.68$ ; 増えた,  $M = 3.85$ ,  $SD = 0.66$ ) のいずれの要因でも、家族とのコミュニケーション機会が増えた人と減った人の間に有意差は見られなかった。

## 5. 考察

本研究の目的は、コロナ禍でのコミュニケーションスタイルの変化が人々の関係流動性、オンライン上での関係流動性、および異文化間感受性にどのような影響を与えるのかについて検討することであった。それにより、以下の3つのリサーチクエスチョンについて検討した。

### 5.1 対面時の関係流動性とオンライン上での関係流動性の違い

対面時の関係流動性とオンライン上での関係流動性を比較したところ、新しい人に出会う機会を表す「出会い」および周りの人間関係構築の対象を選べるかどうかを表す「選択肢」の両方において、オンライン上の方が対面時より関係流動性が高いことが示された。新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン上でのコミュニケーションが増えたことで、オンライン上での新たな人間関係構築が増えたことが理由として考えられる。

### 5.2 関係流動性、オンライン上での関係流動性および異文化間感受性の相関

関係流動性、オンライン上での関係流動性、および異文化間感受性の相関を調べたところ、各要因間で弱い正の相関があることがわかった。関係流動性およびオンライン上での関係流動性が向上すると、異文化間感受性も高まり、また異文化間感受性が高まることにより対面時、オンライン上においての両方で関係流動性が高まることが示された。また、対面時の関係流動性が高い人はオンライン上でも関係流動性が高いと考えられる。以上の通り、それぞれの尺度がお互いになんらかの関係があるだろうと考えられるが、弱い相関に限られているため、お互いに大きな影響を与え合っているとはいえないだろう。

また、尺度を要因別に細分化した上で再度相関を求めたところ、オンライン上での関係流動性において出会いが多いと答えた人は、人間関係構築の選択肢も多いと答えていた。また、異文化間感



受性において異文化に対して否定的感情が少ない人ほどオンライン上での関係流動性（出会いおよび選択肢）が高い傾向にあった。そのことから、自文化中心主義的（Hammond and Axelrod, 2006）な感情が低い個人の方がオンラインでの交流や人間関係構築がよりスムーズに行えている可能性がある。一方で、異文化間感受性の否定的感情と対面時での関係流動性においてはほとんど相関がみられなかった。また、異文化間感受性の肯定的感情と対面時の関係流動性の出会いにおいては弱い相関が示されたことから、異文化に対して積極的に知ろうとする気持ちや、異文化を尊重する傾向が高い人の方が対面時においては、より多くの新しい人たちと出会える環境におかれていると捉えているようだ。

さらに、コミュニケーションスタイルの変化と関係流動性、オンライン関係流動性、および異文化間感受性の間の相関を調べたところ、関係流動性とコミュニケーションスタイルの変化の間ではほとんど相関は見られなかったことから、個人を取り巻く周りの人々がどれくらい新たな人間関係構築および解消ができるのかについての認識はコミュニケーションスタイルの変化にはほとんど影響されないと考えられる。一方で異文化間感受性についてはオンラインでの交流において弱い正の相関がみられたことから、オンラインでの交流が増えたと答えた人は異文化に対して、よりポジティブな気持ちを持っていることがわかった。また、対面での交流および外出の機会とは負の相関があったことから、コロナ禍において外出する機会が増えたり、対面で家族以外の他者とコミュニケーションをとる機会が増えたりした人ほど、異文化に対して肯定的な感情が減少していることがわかった。これは、慣れ親しんだ文化との親和性が高まった結果かもしれない。コロナ禍において、外出する先は新たな場所というよりは馴染みのある場所であること、対面で会う相手は初めて会う人ではなく（コロナ禍でも会えるような）親密な関係の相手であることの可能性が考えられる。

### 5.3 コミュニケーションスタイルの変化の影響

コミュニケーションスタイルの変化が関係流動性、オンライン上での関係流動性、および異文化間感受性にどのような影響を及ぼすのかについて検討したところ、いくつかの要因が関係流動性、オンライン上での関係流動性、および異文化間感受性に影響していることがわかった。

まず、対面で人々と会う機会の変化については異文化間感受性およびオンライン関係流動性に影響があったことが示された。対面で人と会う機会が増えたと答えた人の方が減ったもしくは変わらないと答えた人よりも異文化間感受性が減少していることがわかった。また、オンライン関係流動性も低くなっていた。そのことから、コロナ禍において、対面での交流が制限されている環境下で、対面で人と接することが増えたと答えた人に関しては、なんらかのネガティブな経験が影響している可能性が示唆される。一方、対面での関係流動性では変化はみられなかったが、そもそもコロナ禍において対面での交流が増えたと答えた人が少なかったため、対面で人と会う機会の変化は対面時での関係流動性にあまり影響を及ぼさなかったのではないかと考えられる。

外に出かける機会については、コロナ禍において外に出る機会が増えたと答えた人は、減ったもしくは変わらないと答えた人に比べて、異文化間感受性が減少し、オンライン関係流動性が低くなったことが示された。全体的に、対面で人と会う機会の変化と似たような結果となった。

オンライン上での交流の機会の変化がそれぞれの尺度にどのような影響を与えたかについては、オンラインでの交流が増えたと答えた人は、異文化間感受性が上がり、オンラインでの関係流動性も高まることが示された。コロナ禍において、オンライン授業の増加やSNS上で人々と接することが従来と比べて活発となったことから、オンライン上での交流が増えたことにより、オンライン

上での関係流動性が高くなるのはごく自然なことであると考えられる。また、異文化間感受性についても、オンライン上では自分の普段生活している地域以外の人々や対面で日常的に接触する友人以外とも交流する機会が多く提供されることから、異文化間感受性が高くなったのではないかと考えられる。これらの結果を、各尺度を要因別に見たときには、オンラインでの交流の増加は対面での関係流動性（出会い）にポジティブな影響を与えていることがわかった。それにより、オンラインでも人との交流が増えることによって、個人の周辺の人たちの新しい人と出会う機会に対する認識は変わるようだ。また、オンラインの交流機会が増えるとオンライン上での関係流動性（出会い）および（選択肢）も向上していた。さらに、異文化間感受性においては、オンラインでの交流が増えた場合、より異文化に対して肯定的に捉え、異文化について考えを深めたり、否定的な感情が減ったりすることが示された。

最後に、家族内での交流の増減が各尺度にどのように影響しているかについて検討したところ、家族内でのコミュニケーションが増えたと答えた人は、減ったもしくは変わらないと答えた人と比べて、対面での関係流動性が高くなっていることが示された。従来であれば、大学進学にあたり、一人暮らしを始める学生も少なくないと考えられるが、新型コロナウイルスの影響により、実家に留まる学生が増え、自然と家族内でのコミュニケーションが増えたのではないかと想定する。その場合、今まで知らなかった両親や兄弟の一面を知ったり、お互いの絆を深めたりすることにより、関係流動性が高まったのではないかと考えられる。

## 6. まとめ

本研究では、対面時の関係流動性とオンライン上での関係流動性の違い、関係流動性・オンライン関係流動性と異文化間感受性の相関、およびコミュニケーションスタイルの変化が関係流動性および異文化間感受性に及ぼす影響について探索的に調査することを目的としていた。分析の結果、以下の点が明らかとなった。

- (1) コロナ禍においては、オンライン上での関係流動性の方が対面時の関係流動性より関係流動性が高いことが示された。
- (2) 関係流動性、オンライン上での関係流動性、異文化間感受性の間には弱い正の相関があることが示された。
- (3) コロナ禍において対面で人々と会う機会や外出する機会が増えたと答えた人は異文化間感受性およびオンライン関係流動性が低くなることが示された。一方でコロナ禍において家族内でのコミュニケーションが増えたと答えた人は、対面での関係流動性が高くなったことが示された。

以上の結果を踏まえ、コロナ禍における人間関係に対する認識の変化、異文化に対する受容性、およびコミュニケーションスタイルの変化の関係について考察した。関係流動性についてはコロナ禍においては、交流を実施する環境がオンライン上の場合、対面時よりも関係流動性が高くなっていることが示された。したがって、より活発な国際交流を促進するためには、対面での交流も行いつつ、オンライン上の異文化交流なども継続して実施する必要があるのではないかと考える。また、文部科学省（2019）が示したオンライン教育の指針からも、今後オンライン教育が増え、オンライン上で人間関係構築を行ったり、交流をしたりする機会が増えると考えられる。オンライン授業など一定数のオンラインでの人間関係構築や他者と交流する機会も継続するだろう。オンライ

ン上での異文化間交流がより一層活発となる将来を見据えて、オンライン上で異文化的背景を持つ人々と円滑にコミュニケーションをとるためには、日本人学生におけるコミュニケーション能力や語学力、自己表現能力の向上が重要になるのではないかと考える。

今後の研究では、アフターコロナの新たな生活様式における人々の関係流動性や異文化感受性についても検討していく必要があると考える。また、今回の調査ではオンライン上での交流に用いる媒体を特定していなかったため、今後の研究では Teams、LINE、Twitter など、どの媒体を用いた交流を想定しているものなのかについても、調査する必要があると考える。

## 引用文献

- Barclay, Pat. (2016). "Biological Markets and the Effects of Partner Choice on Cooperation and Friendship." *Current Opinion in Psychology* 7 (February): 33-38.
- Bhawuk, D. P. S. & Brislin, R. (1992). The measurement of intercultural sensitivity using the concepts of individualism and collectivism. *International Journal of Intercultural Relations*, **16**, 413-436.
- Chen, G. M., & Starosta, W. J. (2000). The development and validation of the intercultural sensitivity scale, *Human Communication*, **3**, 1-15.
- Hammer, Mitchell R., Milton J. Bennett, and Richard Wiseman. (2003). "Measuring Intercultural Sensitivity: The Intercultural Development Inventory." *International Journal of Intercultural Relations*, **27** (4): 421-43.
- Hammond, Ross A., and Robert Axelrod. 2006. "The Evolution of Ethnocentrism." *The Journal of Conflict Resolution*, **50**(6): 926-36.
- 文部科学省 (2019) 新時代の学びを支える先端技術活用推進方策 (最終まとめ)  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/other/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/06/24/1418387\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/06/24/1418387_02.pdf) (最終検索日 2022 年 10 月 16 日)
- Schug, J. & Yuki, M. & Horikawa, H. & Takemura, K. (2009). Similarity attraction and actually selecting similar others: How cross-societal differences in relational mobility affect interpersonal similarity in Japan and the USA. *Asian Journal of Social Psychology*. **12**. 95-103. 10.1111/j.1467-839X.2009.01277.x.
- Schug, J., Yuki M., and Maddux W. W. (2010). "Relational Mobility Explains Between- and Within-Culture Differences in Self-Disclosure to Close Friends." *Psychological Science*, **21**(19), 1471-1478, <https://doi.org/10.1177/0956797610382786>.
- 鈴木ゆみ・齋藤誠一. (2016)「異文化間感受性尺度日本語版作成の試み」神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要, **9**(2), 39-44.
- Thomson, R., Yuki, M., Talhelm, T., Schug, J., Kito, M., Ayanian, A. H., Becker, J. C., Becker, M., Chiu, C., Choi, H.-S., Ferreira, C. M., Fülöp, M., Gul, P., Houghton-Illera, A. M., Joasoo, M., Jong, J., Kavanagh, C. M., Khutkyy, D., Manzi, C., ... Visserman, M. L. (2018). Relational mobility predicts social behaviors in 39 countries and is tied to historical farming and threat, *Proceedings of the National Academy of Sciences*, **115**(29), 7521-7526. <https://doi.org/10.1073/pnas.1713191115>
- 山田順子・鬼頭美江・結城雅樹. (2015)「友人・恋愛関係における関係流動性と親密性一日加比較による検討一」実験社会心理学研究, **55**(1), 18-27.
- Yuki, M., Schug, J., Horikawa, H., Takemura, K., Sato, K., Yokota, K., & Kamaya, K. (2007). Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society. *CERSS Working Paper* **75**, Center for Experimental Research in Social Sciences. Hokkaido University.